

会長就任にあたって



一般社団法人軽金属学会
会長 戸田 裕之

この度、平野前会長の後を受け、第20代会長を拝命いたしました。伝統ある本会の会長に就任することは、身の引き締まる思いであり、身に余る光栄でもあります。微力ではありますが、廣澤、徳田両副会長をはじめとする役員各位や櫻井事務局長をはじめとする事務局の方々と力を合わせ、2年間、本会の発展に力を尽くす覚悟でおります。そのためには、何より会員の皆様のご協力が不可欠です。何卒、よろしくお願いいたします。以下、会長就任にあたり、一言、抱負を申し述べさせていただきます。

戦後間もない1951年、軽金属の産学協働の必要性が叫ばれ、本会は軽金属協会の一組織として発足しました。その後、1965年には名称変更・改組して現在に至ります。本会の現在の活動も、維持会員・特別維持会員と称する多くのサポーター企業に強力に支えていただき、企業正会員も多いという特徴があります。多様なバックグラウンドをもつ老若男女が手を携え学術の深化や研究成果の応用を推進する点は、本会の強みと言えます。この実現のため、諸先輩方は、若手の会、女性会員の会、参与会など、特徴ある組織を立ち上げ、奨励賞や女性未来賞といった表彰制度などをも創設しながら多様性を増進してこられました。軽金属で科学技術イノベーションを創出したり、社会的課題を解決するという本会の役割は、地球環境の持続可能性や脱炭素社会実現にも深く関わります。軽金属の学術を専門に取り扱うという世界的にもユニークな本会に対する期待は、ますます高まっています。

しかしながら、本会に関わる将来のシナリオは、必ずしも明るいものばかりではありません。カーボンニュートラルを扱うシンポジウムは大変盛況で、ALMAに象徴される国際交流活動も活発化しています。また、研究部会の数も近年とみに増加し、その活性化を肌で感じられます。一方で、会員数、投稿論文数、講演大会の発表件数など、学会活動の活発さを表す基盤的な指標は、長期的に漸減ないしは停滞傾向にあり、本会も将来的な斜陽化が危惧される状況にあります。

あくまで私見ですが、軽金属分野では、今後、往時の金属基複合材料やナノメタルのような新しく勢いのある研究分野は、そうそうは出てこないでしょう。その意味で、軽金属学は、ある程度成熟した学術と言えます。そのような場合、一般には、周辺の学術分野との連携により学際領域に取り組むことが一つの打開策になります。ところが本会の場合、会員構成の割には生産活動に関する事業が手薄であるとの指摘があります。裏返せば、自らの足元で事業を見直すだけで、さらなる発展の糧が得られることになります。そこで、これまでの学術中心の事業を技術へと拡張し、新しい価値の創造と生産技術とを両輪として学会を発展させることが有効です。これにより、これまで本会とは無縁だった産業界の生産技術エンジニアとともに、軽金属やその利用に関わる産業の発展に直接的に寄与することができます。そのためには、我々の専門観を抜け、再構築することも必要でしょう。

生産技術に関する取り組みは、2051年の創立100周年に向けた長期ビジョン (jilm.or.jp/page-loadmap) の中心課題の一つとして取り上げられています。また、編集、企画、研究、大会運営など、各常設委員会のロードマップにも組み込まれています。熊井前々会長、平野前会長のご指導の下、先行研究部会制度の創設と生産技術関係のテーマの取り扱い、生産技術関連のシンポジウム開催など、すでにさまざまな取り組みが始められています。これらの成果をふまえ、創立100周年に際する軽金属学会の理想形を実現するため、今こそ力強いアクションを起こす必要があります。生産技術エンジニアが講演大会の一般セッションで講演し、技術論文を投稿する将来を思い描きながら、その理想に着実に近付けるような方策を皆で考えたいと思います。

ところで、創立100周年に至る道のりは長く、今後の学会内外の情勢や動向により、長期ビジョンの再検討も必要になるでしょう。本会の将来を明るいものにするためには、ビジョンや施策に若手会員の創造性や豊かな感性を取り入れることが肝要です。本会では、創立50周年を機に、他学協会に先駆けて若手の会を立ち上げ、会員の連携強化やレベルアップによる研究の長期的な活性化を図ってきました。今後は、若手会員の意見に今まで以上に丁寧な耳を傾け、その意見を活動や事業に反映させたいと思います。また、そのための仕組み作りも必要かも知れません。さらに、若手技術者教育の重要性は、これまで以上に増すものと思われる。生産技術関連の教育メニューを考え、体系化し、ICT時代にふさわしい公開方法を検討することが必要でしょう。

このような思いを具体的なアクションに繋げるため、将来を見据えた安定的な学会運営と事業基盤の強化を図りたいと思います。このため、財務状況をしっかり把握しつつ、事業のスリム化と必要な事業への積極的な投資をペアで行います。これは、若手会員や生産技術エンジニアを含め、多様なバックグラウンドとニーズをもつすべての会員が学会の価値向上を実感できるように本会を発展させていくうえで大変重要なことです。

最後に、本会の学術団体としての魅力を高め、軽金属（学）のプレゼンスを高めるため、会員の皆様には、軽金属の学術と技術を取り巻く状況について思いを馳せていただき、今後の本会のあり方を共に考えたいと思います。生産技術と若手をキーワードに、各所で活発な議論がなされることを願いながら筆を置きたいと思います。